

かゝはせむ、先その旨に随ひつ、和名類聚抄には諸國の郷名のうちに、文字を替へて厚田と書り、さて武家執政の世となりては、京都より鎌倉へ通ふ道筋にて、今の如く旅宿もありしよし、吾妻鏡、源平盛衰記等をはじめ、古軍書紀行などに見えたれど、今の繁昌のさまには及ばざりし也、當所地藏院の文正元年五月朔日の古證文に、今道東脇等に住みしと覺しき人の名見えたれど、皆新地なるべく、享祿の宮圖にも、南の方は陸地至て少く、傳馬町のあたりは船のつく濱ばたのやうにおしはからる、されば三四百年已前までは家並は多からず、其後追々海へ築出し、町家どもなりしかども、二百年以前には家作も龜略に、旅宿などもはかどくしからずありしにや、明曆二年に印行したる東海道の道中記といふものに、五十三驛のよしあしをことわりて、なるみ宿惡し、みや宿惡しと書たり、今をもて見れば、其五十三驛のうち、此宮宿にまされる驛はさらになきにて、古今の變革を知るべし、

〔尾張志〕清須。

凡四至の境内ひろく、其地三郡にかゝれり、東は須賀口村を本郷とし、春日井郡に屬けり、東北は市場村、西北は六角堂村、共に中島郡に屬し、西は廻間村、西南は土田村、ともに海東郡とす、是を清須五ヶ村と稱し、其中央清須の町並也、○中犬山は丹羽郡につき、津島は海東郡につきて、餘郡にかゝはらざる地とは例を異にす、永和の頃より、當國の守護、當所に城を築き、國府として政務公事を行ひしなり、されども、斯波武衛家元祖高經より、五六代は京都すまひにて、當城に守護代を置て在國なく、又土岐氏より尾張の守護を兼しときは、美濃の川手に居住して、猶更此清須には代官も置ざれば、守護の在城うちつゝかず、

〔張州府志清洲〕建置沿革 昔王政之盛時、國衙在松下、大守當任、開府於此、中世皇綱、紐解號令不行、源右幕下爲總追捕使、諸國置守護、霸業丕興、國衙迄廢、建武之後、足利氏執權、以斯波氏高經爲尾張、